



石井副学長(左)と有川学科長

東北工業大学(仙台市・渡邊浩文学長)が、「建築」に求められる役割と領域の多様化を見据え、教育環境を充実させるために2020年4月に開設した建築学部が1周年を迎えた。北関東・東北・北海道で初めて創

設された同学部では、工学にとどまらない学際領域の確立を指している。1日から副学長を兼任している石井敏建築学部長・教授と、建築学科長に就いた有川智教授に同学部の現況や今後の展望などを聞いた。

建築学科を工学部から独立させて建築学部を開設した反響について石井氏は「学部開設時に15人増やした135人の定員を2年続けて上回る約160人が入学しており、2021年度も非常に良いスタートが切れた。社会に与えたインパクトと、高校生にとって「建築」が魅力のある仕事に映っていることを改めて実感した」と強調。その上で東日本大震災を経験した被災地の大学としての知見を生かした防災教育や、BIMなどに関する新設科目については、21年

学生が活躍できる場を開拓

防災やBIM科目を新設

度下期以降にスタートすることから「気を引き締めて準備を進めていきたい」と話す。

建築学科の学生に対して、若い担い手が不足している建設産業界が寄せる期待は大きく、就職率は例年高い水準となっている。こうした状況について石井氏は「学科開設から55年で建築を始めとする産業界に8000人を超える卒業生を輩出してきた。そのOB・OGが社会から高い評価を受け、それを積み重ねてきたおかげだ。在学生には震災を経験し、東北の復興に貢献することを目指す学生も多い。ぜひ夢をかなえられるように支援したい」とし、今後も企業とのつながりを大切にしながら学生が活躍できる場を開拓していく考えだ。

有川氏は建設産業界で活用が

進むICTについて「AI(人工知能)やBIMなど、これまでに活用しきれなかったビッグデータが生かせる時代になってきた。学生には基礎力とともに、先端技術を使いこなせるテクニックを習得させたい。日進月歩の技術開発や社会の変化を的確に捉え、将来を見据えて学び続ける姿勢も育んでいきたい」と語る。

また、少子高齢化などの地域課題やSDGs(持続可能な開発目標)への対応といった新たな取り組みが求められている中で「建設業を始めとする多様な産業界の人材マーケットと現場のニーズに学生のポテンシャルをマッチングさせられるようなカリキュラムを編成していく。物事に対する関心と学ぶ面白み、気付きを促す場と雰囲気づくりを心掛けていきたい」と力を込める。

